

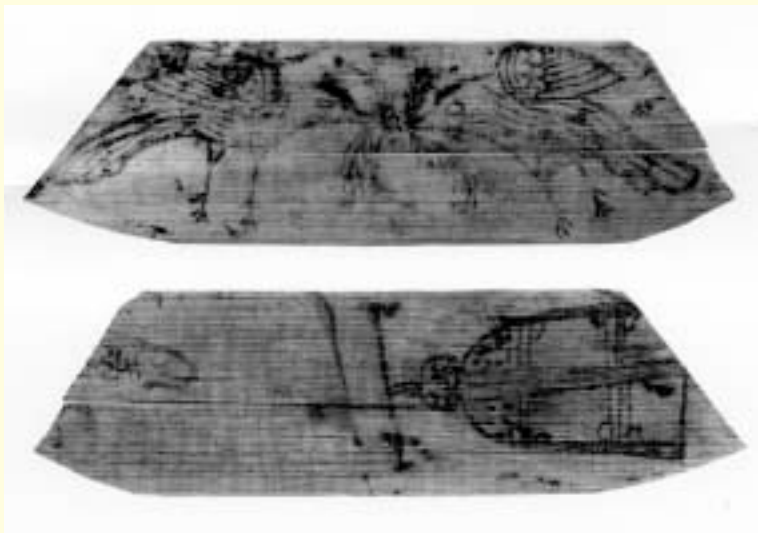
# ◎シリーズ 長岡京歴史散歩

⑪

長岡京のデザイン画  
↳ 製品を飾る鳥のモチーフ

発掘調査では時に心を和ませてくれるような遺物も出土します。今回紹介するのは、裏表に絵画が描かれた非常に薄い板で、開田四丁目の調査で出土しました。また、一緒に出土した遺物などから、薄板が長岡京の時期、今から約1200年前のものであることも分かりました。

絵がかかれていたのは台形に近い形の板材で、両端の長さ約10cm、幅約3cm、厚さが1mmに満たないものです。表面には二羽の鳥が松と考えられ



▲上—表面「鳥」・下—裏面「梵鐘と亀」



▲デザイン画が出土した遺構

る植物の枝を銜えて対になった絵が描かれています。種類は分かりませんが、比較的小型の鳥で、鳳凰のような架空の鳥でないことは明らかです。左側の鳥は尾部および羽根を長く描き、右側が丸味を帯びた胴体を有していることから、左側は雄、右側が雌を描いたと考えられます。この薄板は画面構成が非常に整っており、板切れや土器などの落書き、人形・人面墨書土器や絵馬のような祭祀画とは異なつた、デザイン画と呼べるものです。裏面には梵鐘、亀の頭部と考えられる絵が描かれています。梵鐘の右下部分と亀の胴体は薄板の形を整える際に切り取られています。薄板が出土した右京六条二坊六町には、西市に隣接する工房が存在していました。このことから、薄板は様々なデザインが描かれた大きな「画帳」から、製品を飾るモチーフの原画として表面のデザインを切り抜いたと推測ができます。